

(別紙2)

審査の結果の要旨

氏 名 宋 皓

本論文は、平安朝の代表的な文人たちの漢詩文作品について、とくに散文に重点を置いて、中国文学とも比較しつつ精緻に分析し、その表現の特質、とりわけ自己表現のあり方を解明したものである。はじめに、中国における「文人」の概念の変遷を概観し、本論文における「文人」の意義を明らかにする序文を置くが、この序文において、中唐の文人たちの間では駢儷体を用いない散文による文芸的表現が追究されていたのであり、主として『白氏文集』の受容を通して平安朝の文人たちの間でも新しい散文創作の試みがなされていたという本論文の根幹をなす視点が提示されている。本論は三部十二章からなる。

第一部「嵯峨朝における文人の端緒」は、『白氏文集』渡来以前、嵯峨朝の公宴応制詩における表現の錬磨の中で私的な心情表現の開拓もなされていたことを丹念に析出する。とくに菅原清公の「嘯賦」は、成公綏「嘯賦」や嵇康「琴賦」などの中国における音楽の賦の範型をよく理解した上で、散文の自序を伴う個性的な作品となっていることを明らかにしている。

第二部「詩文創作の意識と九・一〇世紀」は、君臣唱和の漢詩詠作が盛行した嵯峨朝文壇が解体したのち、折しも渡来した『白氏文集』の受容により、菅原道真の「書斎記」、紀長谷雄の「延喜以後詩序」、兼明親王の「池亭記」など、散文による彫りの深い自己表現が生み出されるようになったことを論ずる。この第二部でとくに重要なのは、兼明親王の文学に関する論である。中国における隠逸文学は、閑適と孤高という二つの主題が交錯しながら発展してきたのであり、親王の「兎裘賦」は賢人失志の文学としての『楚辞』の系譜に連なる孤高の文学である一方、「山亭起請」や「遠久良養生方」は閑適文学の系譜に連なるものであることを明らかにして、親王の文学を立体的に奥行き深く捉え直している点が高く評価される。

第三部「文人の憂愁」は、平安中後期の漢文学が、第二部で論じられた九・一〇世紀漢文学の自己表現の達成をいかに継承したかを、慶滋保胤、大江匡衡、大江匡房の文学を通して検証する。大江家累代の文人である匡衡・匡房の文学が、平安朝漢文学の表現の伝統を継承深化させたのに対して、より革新的であった保胤の「池亭記」は、住居の問題を通して平安朝の社会的現実を見据え、また官人生活と仏教信仰の両立を希求していたがゆえに、鴨長明の『方丈記』の先蹤ともなりえたことを論ずる。

本論文には、時にやや性急な図式化が見られるものの、先蹤表現の博搜と精緻な考証、本文の丹念な読解に基づいて、平安朝の漢文学の孕む様々な問題が浮き彫りにされており、審査委員会は本論文が博士（文学）の学位に値するとの結論に達した。